

# 巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 鶴飼 正樹

2008年4月から、人間学研究所所長をひきうけています、鶴飼正樹です。

『人間学研究』第9号を、お届けいたします。

私が人間学研究所所長になると同時に、京都文教大学も、人間学部と臨床心理学部の2学部体制となりました。それぞれの学部で紀要が刊行されるようになったため、この『人間学研究』をふくめ、小さな大学に3つの紀要が鼎立することになりました。

べつに、3つの紀要が対立しているわけではないので、鼎立というのは大げさかもしれません。しかし『人間学研究』が、学部紀要に飲み込まれてしまうのではという心配がないといえ、うそになります。

そもそも、学部に紀要があるのに、研究所でも紀要を出す必要はあるのでしょうか。もちろん、「ある」と答えたいのですが、なかなかストレートにそう答えられないのが、率直なところです。

人間学研究所の役割は、共同研究の推進と、その成果を学外に向けて発信することにあります。そのために必要なことは、「場」をつくることです。共同研究の場、教員・学生・市民の交流の場。所長室、研究室、教室など、現実空間の場もあれば、インターネット空間のような、ヴァーチャルな場もあります。紀要も、そうした場のひとつです。

研究所が独自の紀要を出す以上、それは、学部が出す紀要とちがっていなければなりません。もっといえば、学部紀要に書けないことが書かれた、学部に出せないような紀要を出すべきです。

では、学部に出せないような紀要とは、どんなものなのでしょうか。

研究所の紀要は、いかにあるべきか。この問いを来年度にもひきつぎ、私なりに考え続けていきたいと思っています。

憂慮されるのは、教員が多忙をきわめるようになってきたことです。共同研究は、時間的に、心理的に、余裕がなければできません。自分自身の研究テーマにさえ、十分な時間をあてられないのに、共同研究になんかふりむける時間はない。そういう悲鳴が聞こえてきます。同僚とは、大学の現状や学科・学生の問題について話すことは多くても、研究の話など、このところほとんどした覚えがありません。

いささか誤解を招く言い方になりますが、共同研究は遊びであり、余技です。自分の専門ではないからという理由で、共同研究への参加を遠慮される先生もおられますが、私は逆に、自分の専門でないからこそ、共同研究では、勝手な思いつきが許され、無責任な議論ができる、それが共同研究のおもしろさだと思うのです。けれども、そのためには、やはり余裕というものがが必要です。

しかしここでも、逆に考えてみましょう。忙しくても、「共同研究マインド」を持ち続けることが、余裕を生むのだと。人間学研究所は、多忙な教員が息抜きできる、オアシスのような場でもいたいものです。

紀要の出版にあたっては、人間学研究所所員の先生方、研究支援課の職員のみなさんにお世話になりました。あらためてお礼を申し上げます。